

叡山ノ方ヲ後ニシテ數奇屋ヲ造、北山ノ方ニ大木ヲ植塞、手水鉢ヲ廂屋根下ニ置テ、剩其向ニ方
方壁ヲ塗塞、腰掛ハ本屋ノ陰ニ付、一景モ不晴見、空地無之、誠ニ苦々敷體也、亭主モ雖悔之不及、是
非、笑止至也、思之ニ指圖モ路地モ兼テ可有心得コト也、

〔茶湯古事談^四〕一上京後藤が露地は、小堀遠州の好みにて出來し、加茂川をえかけて大きな泉
水あり、待合より堂腰懸までは船ニ而行なり、舟頭は小坊主のよくこぐ者也、中流にて舟ちんに
肩衣十徳おかせ給へと、無理にとらせて、夫より袴ばかりにて路次入なり、數寄屋は三疊大目也、
刀懸とにじりあがりとの石を壹つにて兼ぬ、巾三尺ばかり長サ七尺餘もあらん、其石より飛石
五ツ有之、長サ貳間半の疊石に、幅八寸めんを切たる切石、相手石も三尺餘有、長石に小石をとり
ませ、其外木立物ふり、面白さいふばかりなかりしとなん、

〔茶話指月集^上〕さる方の朝茶湯に利休その外まいられたるが、朝嵐に掠の落葉ちりつもありて、露
路の面さながら山林の心ちす、休あとをかへりみ、何もおもしろく候されど、亭主無功なれば、は
き捨るにてぞあらんといふ、あのごとく後の入りに一葉もなし、その時休總じて露路の掃除
は、朝の客ならば宵にはかせ、晝ならば朝、その後は落葉のつもるも、そのまゝ、掃ぬが功者也とい
へり、

〔茶窓閒話^上〕織田有樂、或時人々と會しはなされし、高山左近が茶の湯に大病あり、高山は所作
も思ひ入もよけれども、清めの病ありて清き事をえらす、路次の邊はいふに及ばず、方々わきわ
きのえんの下まで掃清め、曾て掃除の際もなし、其世話をやく事、沙汰に聞さへいきだはしく覺
ゆ、潔き費を曉らす、數奇道へ行ぬ事ではをりないか、但し今の世には、高山が類病多しといはれ
しかば、一座の外の人までも聞傳へて、尤といひしとなん、

〔茶傳集^{十三}〕一松葉敷様之事、下地能はきて、初は薄くまく、茶湯一兩日も前にまくが、吉色能を撰